輸入青磁を副葬した中世墓

奈良市西大寺南町（さいだいじみなみまち）

はじめに　今回の調査は西大寺南地区土地区画整理事業に係る発掘調査の一つです。調査地は西大寺旧境内の南東隅にあたり、これまでの隣接地の調査から、奈良時代の遺構が少ない場所と考えられていましたが、当初の予測に反して、多くの遺構が見つかるとともに、奈良市内では初めての青磁と刀を副葬した中世墓が見つかりました。

遺跡の概要　検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、及び平安時代末～鎌倉時代初め頃の墓、溝などです。

掘立柱建物は、２間（4.2 m）×３間（7.2 m）の東西棟建物と、北と東に廂をもつ２間（3.6 m）×２間（5.4 m？）以上の南北棟建物です。

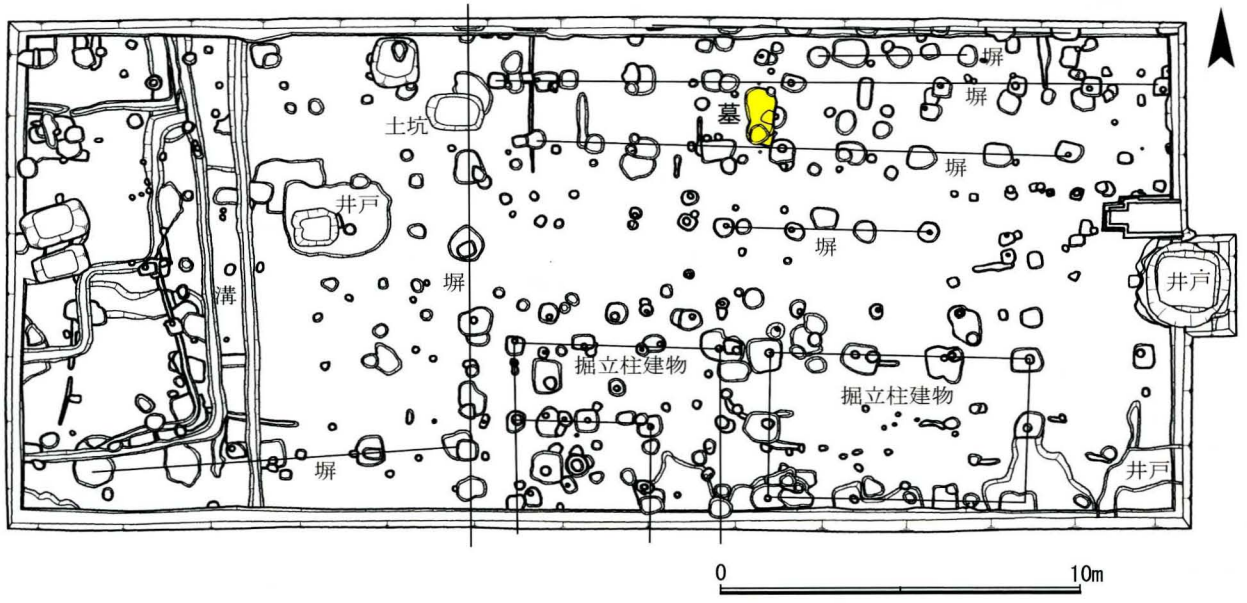
掘立柱塀は、東西塀で最も長いものが９間（18.5 m）以上、南北塀は６間（13.8 m）以上あります。

井戸は３つ見つかり、深さは 1.3 ～ 1.7 mありました。どれも枠板が抜き取られており、西側の井戸の底にだけ、高さ 30 ㎝ほどの縦板が方形に廻らされているのを確認しました。井戸からは奈良時代の須恵器壷・甕や土師器甕が出土しました。

中世墓は発掘区中央部の北側で見つかりました。南北約 1.6 m、東西約 0.8 m、深さ約 15 ㎝の隅丸長方形の土坑墓で、中国製青磁５点と鉄刀２本が副葬されていました。骨は残っておらず、棺の痕跡も見当たりませんでした。副葬された青磁は 12 世紀後半のもので、平安時代末～鎌倉時代初め頃に埋葬されたものと考えられます。

このほか同時期の遺構として溝や柱穴もいくつか見つかっています。明確な建物跡は認識できませんが、中世にはこの場所が屋敷地や耕作地として利用されていたと考えられます。

調査位置図　(1/5,000)



発掘区遺構図（1/200）

発見された中世墓　今回見つかった墓には遺体は残っていませんでしたが、出土遺物とその出土状態によってこれが墓であると判断できました。墓の中には、中国から輸入した青磁椀２つと青磁小皿３つが重ねて入れられており、その北側には漆塗りの鞘に入っていたとみられる長さ約45㎝と約30㎝の２本の鉄刀が並んでいました。青磁椀は龍泉窯系、青磁小皿は同安窯系の製品で、椀には飛雲文、小皿には櫛点描文という独特の文様があしらわれています。

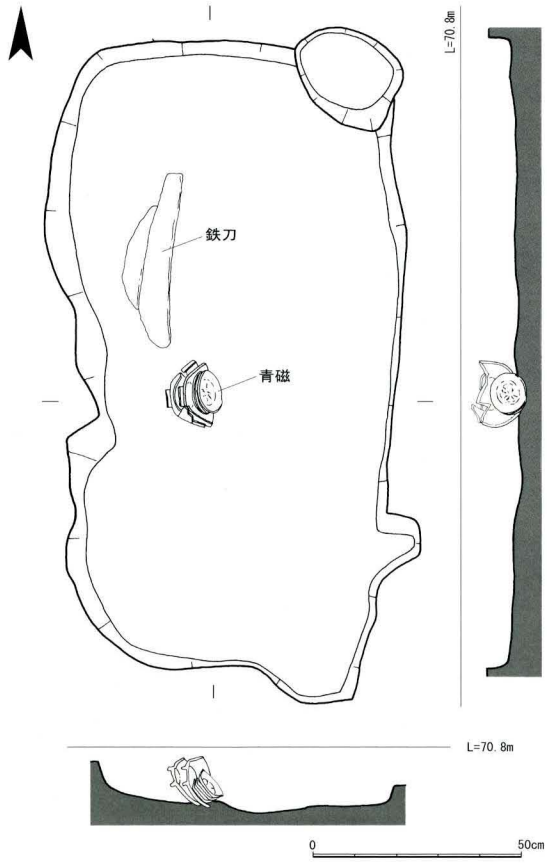
被葬者については不明ですが、輸入陶磁器や刀が納められているということは、墓地に埋葬できなかった一般庶民をやむなく葬ったということではなさそうです。

このような土坑墓は11世紀中頃から建物群のそばで見られるようになります。通常単独で存在し、多くても３つまでです。中世後期以後発達する共同墓地とは異なり、建物を中心とした屋敷地内に葬られていることから、このような墓を「屋敷墓」と呼んで、その土地の所有者の世襲権に関わる重要な葬送行為として意義付ける考えもあります。

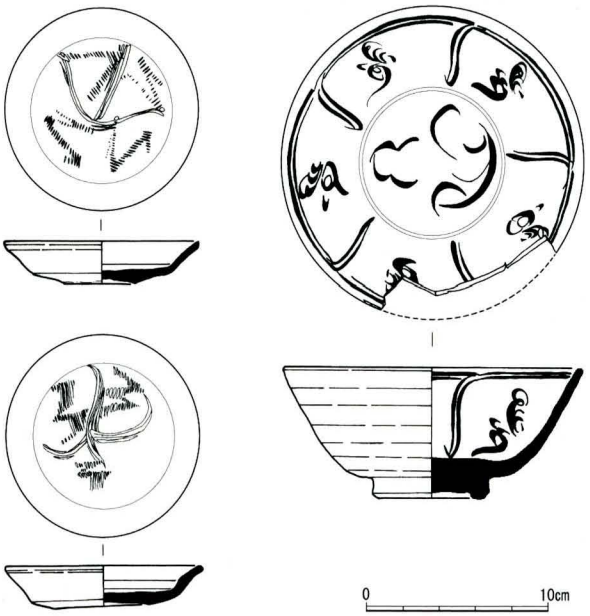
この墓に伴う建物跡は明確ではありませんが、この地に屋敷を構え耕作地を持つ地位にあった人物の墓である可能性が高いと考えられます。

中世墓（南東から）

出土青磁椀・小皿



中世墓平面・断面図（1/20）



青磁小皿・椀（1/4）

発行　奈良市教育委員会　平成20年３月３日